

八、イエスの変貌——宗教的恍惚と社会的行動（居場所を変える）

ルカによる福音書第九章二八—四三節

キリスト教の歴史を通じて、礼拝と行動、祈りと政治を切り離す企てがなされてきた。最近では第三世界の「解放の神学」に対して嫌疑がかけられている。例えば、解放の神学は福音を「単なる政治」に矮小化しているとか、「水平主義」すなわち神との「垂直の」関係が欠如した倫理観に陥る罪を犯しているとかいうのである。そのような嫌疑がいかに見当違いであるかはすでに見てきた通りである。

このような問題についての国内的論議に新しい屈折が生じてきている。かつては最も激しく「宗教と政治は馴染まない」と断言してはばからなかった人々が、今や問題はもはや「政治」そのものではなく、ある種の政治すなわち「左翼的政治」だけが問題なのだ、と唱えるようになって

てきている。右翼的政治ならいいというわけである。今ではテレビ伝道師や教養ある保守主義者が、軍事予算増大や死刑や核戦争を含めて、「共産主義と闘う」ためのあらゆる手段に対して——すべてキリストの御名において——支持を与えることが珍しいことではなくなっている。

少なくとも戦線には異状が生じたのである。私たちはもはや「宗教と政治は馴染むであろうか」と問う必要はない。なぜならばその答は「勿論、その通り」だからである。その代わり私たちはその馴染み方について検討することが必要になっている。

本章における私たちの課題は、私たちが礼拝している神の性質と、私たちが神の御名においてなしている人間的行為の性質との間に、できる限り最大限の一致を打ち立てることであり、そのために生活の二つの側面——礼拝と行動——が絶えず相互作用する手助けとなるような聖書資料について考えることである。例えば、軍事予算増大を支持するキリスト者は、自分の立場と自分が礼拝している神との間の不一致とに組み込む必要がある。詩篇四六篇が朗読される時にはいつでも、「主は地のはてまでも戦いをやめさせ、弓をおり、やりを断ち、戦車を火で焼かれる」(九節)という宣言がなされる。そこでは神の明確な目的は、新しい武器を作ることよりも、むしろ古い武器を壊すことである。そして国防総省の予算は弓ややりや戦車のためには全く使われていないと答えてみても、それは満足のゆく答ではない。なぜならば「弓」の現代版はM1ライフル

であり、「やり」の現代版は六四の都市を破壊できるトライデント・ミサイルであり、「戦車」の現代版は核抑止政策であるからである。

本章は、いわゆる「宗教的」活動と「世俗的」活動の関わり合い方の性質に探りを入れ、そして礼拝と議会請願、祈りと政治、信仰と民主主義、賛美と社会参加、聖書と選挙といったものを、表裏一体のものとして見抜く方法を見出す必要を示す一例に過ぎない。

イエスの宣教活動の中には、私たちの議論を鮮明に映像化しているような二つの話（通常、別々の話として理解されている）がある。問題の核心はそれらが二つの話ではなくて、一つの話だということを示すことである。

聖書のテキスト ルカによる福音書第九章二八―四三節

これらのことを話された後、八日はどたつてから、イエスはペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられる間に、み顔の様が変わり、み衣がまばゆいほどに白く輝いた。すると見よ、ふたりの人がイエスと語り合っていた。それはモーセとエリヤであったが、栄光の中に現れて、イエスがエルサレムで遂げようとする最後のことについ

て話していたのである。ペテロとその仲間の者たちとは熟睡していたが、目をさますと、イエスの栄光の姿と、共に立っているふたりの人を見た。このふたりがイエスを離れ去ろうとしたとき、ペテロは自分が何を言っているのかわからないで、イエスに言った、「先生、わたしたちがここに居るのは、すばらしいことです。それで、わたしたちは小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。彼がこう言っている間に、雲がわき起って彼らをおおいはじめた。そしてその雲に囲まれたとき、彼らは恐れた。すると雲の中から声があった、「これはわたしの子、わたしの選んだ者である。これに聞け」。そして声が止んだとき、イエスがひとりだけになっておられた。弟子たちは沈黙を守って、自分たちが見たことについては、そのころだれにも話さなかった。

翌日、一同が山を降りて来ると、大ぜいの群衆がイエスを出迎えた。すると突然、ある人が群衆の中から大声をあげて言った、「先生、お願いです。わたしのむすこを見てやってください。この子はわたしのひとりむすこですが、霊が取りつきますと、彼は急に叫び出すのです。それから、霊は彼をひきつけさせて、あわを吹かせ、彼を弱り果てさせて、なかなか出て行かないのです。それで、お弟子たちに、この霊を追い出してくださいに願いましたが、できませんでした」。イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な、曲った

時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか、またあなたがたに我慢ができようか。あなたの子をここに連れてきなさい」。ところが、その子がイエスのところに来る時にも、悪霊が彼を引き倒して、引きつけさせた。イエスはこの汚れた霊をしっかりと、その子供をいやして、父親にお渡しになった。人々はみな、神の偉大な力に非常に驚いた。

一週間ほど重苦しい日が続いていた。イエスと弟子たちは北部地方に出かけていたが、彼らには思い巡らしていることがあった。神の国は一晚のうちに出現してきてはいなかった。しかし神の国についての考え方を明確化する機会があった。イエスは弟子たちに、人々は自分を誰と言っているかと尋ねたのであるが、バプテスマのヨハネとかエリヤとか預言者の一人とかいういつもの答が返ってきた。しかしその時、イエスはもつと難しい質問を出した。「あなたがたはわたしをだれと言うか」(ルカ九・二〇、傍点著者)。ペテロは答えて言った、「神のキリストです」(「クリストス」はギリシャ語で、ヘブル語の「メシア」に相当する言葉であり、神に「油注がれた者」を意味している)。マタイの並行記事においても、ペテロは全く独特な反応を示しているが、自分が何のことを語っているのか全く分かっていなかったことは直ちに分かる。

一二人の弟子たちはみな別の考え方をし始めたに違いない。なぜならばイエスはその時をとらえて、初めてペテロの口をついて出た告白の持っている意味を説明し始めたからである。イエスは彼らに向かつてはつきりと「神のキリスト」であることは殺されること、おそらく二週間のうちにそうなることを意味していると告げたのである。

その言い方では十分でないかのように、イエスは、メシヤに待ち受けていることはメシヤに従っている者たちにも待ち受けていると告げた。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」(ルカ九・二三)。(御存知かも知れないが、「十字架」という言葉はイエスの聴衆にとって言葉の上だけのことではなかった。彼らは教会の指導者たちのお腹の上にぶら下がっているような十字架など一度も見たことはなかった。その代わり、拷問と徐々に死に至らしめる道具としての十字架はたくさん見ていた。)それからイエスは話を話で終らせないために、直ちにエルサレムに向かつて歩き始められた。エルサレムはまさに弟子たちにとって最強の敵の本拠地があった所であり、十字架を負うということがいかに生きるかではなくて、一様にいかに死ぬかを意味している町であった。

それゆえに重苦しい日々が続いていたのである。さて八日ほど旅をした後、イエスはペテロとヨハネとヤコブを連れて近くの山に登られた。祈りをもとにすることによって、エルサレムで待

ち受けている耐えがたい出来事に対して心の準備をするためであった。

祈りはいつもの祈禱会のように始まったのであるが、弟子たちは直ちに一つの幻を見ることになった。イエスの御顔の様が変わり、モーセとエリヤと語り合っているのが見えた。第三世界の読者にとって、これらの人物の登場は重要である。なぜならばエルネスト・カルデナルが言っているように、モーセはイスラエルをバロの支配から導き出した偉大な解放者であり、エリヤは貧しい人々や抑圧された人々を擁護した預言者であったからである。イエスはエルサレムでの来るべき対決について彼らと語り合っていたように見えた。解放を必要としている貧しい人々や抑圧されている人々への関心が話の中心であったことは間違いないさうである。

ペテロ、ヤコブ、ヨハネはどのような反応を示したであろうか。山の頂上には彼らに抗することのできないほどの緊張感が張り詰めていた。そして数日後のエルサレムの庭園での振舞いを予告するかのように、彼らは眠りに落ちかけていた。(八日間の道のりでへとへとになっていたことをも考慮してやらなければならない。)ひと眠りして疲れが取れた時、その場の空気はさらにいっそう張り詰めたものになった。彼らは「栄光」(三二、三三節)を見たのである。「栄光」とは特別な聖書用語で、神の御臨在を畏怖の念をもって感じることを意味している。そして幻が消え始めた時、よく考えてからものを喋るということをしないうペテロは、律法が与えられたことを

祝う仮庵の祭のことを思い出して、「小屋を三つ建てましょう」と出し抜けに言った。「ここにとどまりましょう。リトリート・センターを建てて、瞑想用チャペルを完成し、そして今感じている『宗教的体験』が薄れてゆかないように大切にしましょう」と言わんとしているかのようであった。これは特に魅力的な提案であったことであろう。なぜならばエルサレムでの十字架を選取するしか他に道は残されていなかったからである。

しかしながら彼の提案は神秘感が増すに連れ、賛成を得られないまま立ち消えになった。弟子たちは雲が自分たちの回りを取り囲んできた時、(a)恐れ、そして(b)沈黙した。これらのことは莊嚴なものに対する誤った反応ではない。雲の中からの声は(似たような声——あるいは同じ声——がイエスの洗菊の時にもあった)、「これはわたしの子、わたしの選んだ者である。これに聞け」と語った。

そして声は止み、三人はイエスだけとそこに残されていた。ペテロでさえも沈黙してしまったが、そのことは経験したことの圧倒的格をおよそ考えうる限り印象的に立証するものであった。翌日の朝、一同が(小屋は建てずじまいで)山を降りていった時にも、彼らはまだ圧倒されていた。この次第を語り合うことすらできないでいた。

イエスはどのように反応したであろうか。イエスの立場に立ったりするのは厚かましく見える

けれども、二、三の手がかりを話の中から拾い上げることができる。

イエスはエルサレムに着いた時、何が自分たちを待ち受けているかについて他の誰よりもよく知っていた。それゆえに旅の途中で祈りに行かれた時、彼は厳しい事態が始まる前に自分を再点検しておく必要を明らかに強く感じていた。

山を登って行った時に彼が何を望んでいたにせよ、その思いはいっそう強固になった。まず彼は神の持続的な働きを自分が継続しているのだという強い自覚を抱くようになった。モーセやエリヤの後に続くことがその最善の方法であった。そして次に雲の中からの声は彼の受洗以来の行動が標的になっているのだという確信を与えている。

イエスは、山の頂上にとどまって宗教的恍惚に浸ろうというペテロの提案には応じなかった。第一章において私たちは、「宗教的体験」が終った時イエスは直ちにエマオを去られたということを読んだ。それは起こすべき行動はもはやエマオにあるのではなかったからである。本章においても私たちは、行動はもはや山の頂上にあるのではないことを見出すのである。

行動はどこにあるか。山の麓にある。イエスの下山は人間的必要に対する応答へと直ちに導かれており、てんかんの少年が癒される（三七―四三節）。

この物語全体においていくつかの主題が扱われているが、私たちにとって重要なことは、物語

全体はここで終るのであって、山の頂上で終っているのではないという事実である。なぜならば心を取り乱したてんかんの少年の父親が助けを求めにきた時、イエスは、「ちょっと待ちなさい。私は素晴らしい経験をしたばかりでこの興奮を失いたくない。弟子たちに息子をみてもらいなさい。ルカは医者だし、もし彼でも手に負えないようなら、多分来週火曜日の九時に面会の約束ができるでしょう」などと答えていないからである。そうではなくて、事柄は緊急を要した世俗的かつ人間的なことであり、見ていて楽しいものではなかった。てんかんでひきつけを起こした人を放置しておくことはできない。

宗教的恍惚とてんかんの癒し——この二つが一つのセットになっているのである。これこそがメシヤの救いが意味していることである。すなわち貧しい人々、病氣の人々、無力な人々、ひきつけを起こしている人々の真つ只中に立つことである。メシヤの救いは、キリスト者の生活と同様、ただ単に「山頂の経験」だけのことでも、「人間の福祉に関わる行為」だけのことでもない。それは二つが必然的に結び合わされたものである。

考察と議論のための課題

1 「すべては神秘主義に始まり、政治に終る」というシャルル・ペギーの言葉について議論しなさい。これはイエスの変貌物語に当てはまることであろうか。あなた方はこの真理の具体例を今までに見たことがあるだろうか。また逆の命題は成り立つであろうか。

2 私たちの文化の中には、礼拝生活が礼拝者の政治的洞察や活動に役立っているような具体例が（良きにつけ悪しきにつけ）あるであろうか。また逆の順序は成り立つであろうか。

3 東方教会の教会暦では、八月六日は本文に記されている出来事を祝う変容の祝日となっている。西欧の世俗の暦では、八月六日は広島に最初の原爆を投下した記念日となっている。どちらの記念日も歴史の流れを変えることとなったある種の「変貌」をもたらした力を例証している。これらの異なった種類の力の特徴は何であろうか。それらをじかに対決させたらどちらに勝ち目があるだろうか。

4 ラテン・アメリカの教会では、社会変革のプラクシス・モデルと呼ばれるものが大きな注目を集めている。「プラクシス」praxis とは、考察と行動の間で進行する相互関係として定義される。まず行動をなし、その後行動について考察する。その考察は私たちがより効果的に行動することを可能にし、次にその行動は私たちがより創造的に考察することを可能にする。このようにして、私たちはより効果的に行動できるようになるというのである。（より詳細な議論は第一章を参照すること。）この点が変貌物語にまつわる出来事においても機能していることが分かるであろうか。それをモデル化してみると、行動（五千人の給食）、考察（あなたがたはわたしをだれと言うか）、行動（エルサレムへの出発）、考察（山頂での変貌）、行動（下山とてんかんの少年の癒し）等々といった具合になる。これは私たち自身の状況における礼拝と行動の関係についてどんなことを示しているであろうか。

5 あなた方は、十字架もなく口から泡を吹いている子供もいなくて安全な山頂にとどまりたかったベテロ、ヨハネ、ヤコブの中にどれほど自分自身を見出すであろうか。弟子たちの内面的葛藤を描いた一つの讃美歌があるが、その讃美歌はどの程度まであなた方に当てはまるか考えて

みていただきたい。初めの方の節では山頂での体験が賛美されており、各節では、「主よ、ここに
いるのは何と素晴らしいことでしょう」というリフレインが繰り返されている。そして、もし
「この丘をわが家とする」ことができさえすれば、さまざまな信仰的利点が生じてくることを列
挙している。しかし最終的には、居場所を移すことに同意し、そのことを最後の方の行は次のよ
うに記している。

主よ、ここにいるのは何と素晴らしいことでしょう。

しかし、私たちはここにとどまりません。

あなたは山を去るようにと命じておられます。

ですから一緒に麓まで降りていって下さい。

(“How Good, Lord, to Be Here!” by Joseph Armitage Robinson; The Australian Hymnal, 390)